

地域でこんな困り事は起きてませんか？



移住者と
前から住む人の
間に溝がある



子どもの居場所
づくりの賛同者・
協力者が思うよ
うに増えない

会合で同じ人
ばかりが発言。
他の人は黙って
いる...



もっとお互いを理解しあうコミュニケーションの
できる場が必要なのでは？

移住者が住民の
話を聴き、
住民が移住者の
考えを聴く
“聴きあう場”

今、地域で何が
起きていて、
なぜ活動が必要
なのかを説明し、
質問もできる場

黙っている人の考え
を個別に聴き、その
意見の大切さに本人
も周りの人も気付く場
づくり

話を丁寧に聴き、



つながりを促す



話し合う場をつくり、

地域の人と共に対話と共創を進める場づくりの担い手が

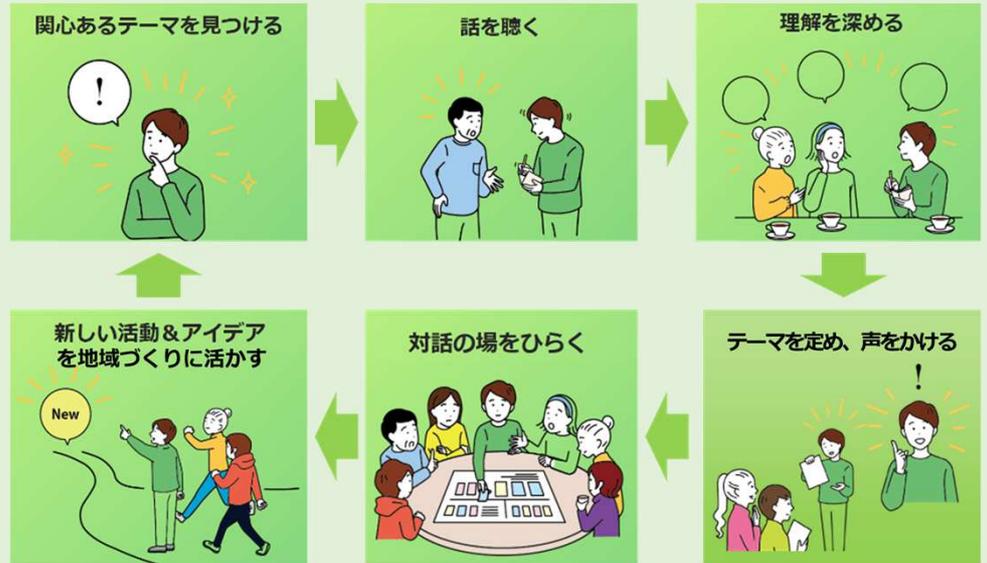
まちむら寄り添いファシリテーター です



まちむら寄り添いファシリテーターって、どんな人？

まちむら寄り添いファシリテーターは会議やワークショップの進行だけでなく、地域の人の思いを聴き、それをつむぐ対話の場づくりを通して、未来につながる活動への協力・参画を促す役割も担っています。

その活動の基盤にあるのが、地域の人の暮らしや経験を理解し、今とこれからへの思いを丁寧に「聴く力」です。そして聴いたことから地域の歴史や文化を理解するだけでなく、そこに未来へとつながる芽を見つけ、「変化を育んでいく力」も大切にしています。地域の人に寄り添いながら、地域の“これまで・今・これから”を対話する場を担う存在です。



長野県内各地で、自分のテーマを軸に地域に寄り添った活動をしています！



副島 優輔さん
佐久穂町

移住後に地域の人のお話を聴くことで良い関係を築くことができた自分の経験から、Uターン者が地域の人のお暮らしやまちの歴史を聴き、地域の魅力を再発見する「集落の話の聴き手事業」を立ち上げました。



西山 良子さん
長野市豊野町

不登校や行き渋りなど、お子さんが学校を離れて過ごしている家庭の保護者同士で安心して話せる会を始め、校長先生や地域の協力者とも対話会を続ける中で、4月から4校で校内親の会をスタートすることになりました。



関野友憲さん
須坂市

地域のデジタル化を進めるには、住民の思い・考えを活かしながら進めることが大事と考え、地域でのファシリテーター講座を開催しました。「あったらいいな」を話し、形にできる地域づくりを進めていきたいです。



松本 寿治さん
松川村

デザインを活かした地域活性化や農作物のブランディングを行うと共に、地域の声を聴いて公民館事業を企画しています。公と民の垣根を超える対話を通して自分たちの手でやりたいことを進める地域の力を高めたいと思います。



北澤孝代さん
駒ヶ根市

「親と子学び・育ちの会まねきneko」で、子どもたちの遊び場やお母さんたちの気晴らしの場など様々な交流の場を行っています。「支援する一支援される」ではなく、子どもも関わる大人も一緒に楽しめる場づくりを心がけています。

まちむら寄り添いファシリテーターの活動を、特設ページでの記事と、YouTube「信州まちむらラジオ」でご本人出演の番組で紹介しています。

YouTubeはこちら⇒



「まちむら寄り添いファシリテーター」に関心を持ったのはどうして？

令和6年度の養成講座には、長野県上伊那郡中川村から3名が誘い合って参加しました。「まちむら寄り添いファシリテーター」に関心を持ったのは、どうしてか、お聞きしました。



島崎 敏一さん

第17期中川村議会議員
建築大工。空き家、循環型社会等、地域の課題に奔走中。今期2回目の受講



大島 歩さん

第17期中川村議会議員
(株)大島農園として、有機農業を営む



松原 沙織さん

学校と地域をつなぐ地域コーディネーターとして活動

まちむら寄り添いファシリテーター養成講座に参加しようと思った理由は？

村議として、行政と住民の橋渡しをする中で、一人ひとりが「自分ごと」として地域づくりに関わる当事者意識が大事だと常々感じていました。そこで関心を持ったのが「ファシリテーション」でした。前年度の講座の中で、行政職員や市民団体の人と同じ舞台上でフラットに意見交換できたことが新鮮で刺激的でした。もっと学びを深めようと続けて受講しました。



島崎さん、松原さんと統合される学校への思いを話す場を作ったりする中で、ファシリテーションに興味を持ちました。楽しそうだし、普段出会えない人たちと出会えそうと思って参加しました。



地域の会議で色々な立場の人が関わっているのに意見を言える雰囲気じゃなかったり、行政と住民が意見を聞きあう関係になるのは難しいと感じていました。他の座談会などでファシリテーターがいると活性化しているので、私も学びたいと思いました。



講座を通して気付いたことは？ どう実践に活かそう？



モデル事例分析の中で、市職員にインタビューをした際、職員も行政という枠の中で試行錯誤しながら地域のために頑張っていると気付いたことで、地元に戻っても行政の方の気持ちがめっちゃわかるようになりました。日頃のコミュニケーションが変わり、関係も変わってきたと実感しています。

コミュニティ活動の現場に参加し、「思いのある人がコアな部分にいて、その周りにゆるくつながっている人がいる関係」「自分の熱量が上がることでないと続かない」など、前から漠然と感じていたことを改めて確認できました。日常では活動に追われ、しっかり言語化はできていなかったことを言葉にする時間を持つことで自信を持って動けそうです。



ファシリテーターとは自分の思いを成し遂げるものではなく、コミュニティに集まる人の声を聞くこと、そしてその声を形にすることが大切だと学びました。学校に関することも、大人も子どももどんなことを思っているか、どんなことをしたいのかしっかり聴くことが大切だと思っています。

地域には学校に関わりたい、地域を元気にしたい、文化を次世代につなげたいなど、〇〇したい人はいます。つながりをつくることで、その人たちが動き出すことを手助けできれば嬉しいです。そうやって行動する人が増え、地域の地熱が上がっていけばいいなと思います。



令和6年度受講生の考える「まちむら寄り添いファシリテーター」って？

ワークショップで出されたキーワードから

発言しづらいと思う人のことを気にとめている

「あなたの意見が必要」と心から思っている

場を和ませる。この人なら話して大丈夫と思える

場のメジャーな意見に、あえて反対を投げかける

着地点ありきでなく、オープンに話し合う

声を聴きまくって、ニーズを理解している

話を聴く、まとめるだけでなく、人をつなげていく

多様な意見それぞれに一理あると思える

地域を鳥の目(俯瞰)から考えている

トップダウン型の意思決定を変えていく

なにかしよう！と言い続け、小さな成功を喜べる

この場に来てない人の考えにも思いをはせる

地域の人の中にある声・思いを信じている

聴くことの意味や大切さを分かち合っていく

自己決定できるチーム・地域を増やす

地域づくりには、まちむら寄り添いファシリテーターが必要！

社会の変化が激しく、価値観も多様化する時代、まちづくりや地域課題解決を進めるには多様な住民や関係者が、それぞれの思いやできることを持ち寄って「ともに考え、ともにつくる」プロセスが不可欠です。そのプロセスを進めるために、まちむら寄り添いファシリテーターは次のような役割を担います。

住民の思いに耳を傾ける

自分の思いや困りごとを「言わない」「言えない」人はたくさんいます。その人たちの思いに耳を傾け、安心して声を出せる場をつくります。

多様な人のつながりをつくる

同じ地域でも、世代、分野、立場、地域との関わり方が違うとつながりづらいものです。地域の人の声を聴き、共有できるテーマでの対話を行うことで、違いを越えたつながりを作ります。

対立やズレを調整し、前に進める

多様な人の集う地域の話し合いでは考えがすれ違い、感情的な対立になることもあります。ファシリテーションを活かし、建設的な議論を進めます。

地域に関わる入り口を増やす

「地域で何かしたい」と思っている、既存のつながりには参加しづらいもの。多様な立場の間に立ち、地域での活動への入り口を増やします。

相互理解と合意形成を進める

一方的な情報提供や指示出しでは納得感は高まりません。対話での相互理解や合意形成のプロセスを共にすることで共創の意識を根付かせます。

共に未来を描くことで、協働を促す

「誰かが決めた未来像」だと他人事となりがちですが、自分も話し合いに参加して創った未来像には当事者意識を持てます。ビジョンや計画を共に作り、実現の参画者を増やす場をつくります。

まちむら寄り添いファシリテーターのネットワークを広げよう！

長野県では、まちむら寄り添いファシリテーター養成講座を通して平成30年度～令和6年度の間に約150名の修了生を輩出しています。

これからの地域づくりにおける役割が重要であることを考え、講座修了生に限らず、趣旨に共感し、地域に根付いた場づくりやコーディネートを行う人も含めて、個々の活動のレベルアップにつながるネットワークを充実していきます。

①地域での実践を学びあう

他の活動者の現場に訪問したり、情報交換することを通して地域での取り組みや実践の工夫を知り、自分の活動のヒントにする。

②共にスキルアップする

聞き書き、ファシリテーション、コミュニティ活動のスキルを学べる講座の情報を共有する。専門家とつながり、相談できる機会をつくる。

③課題を協力して解決していく

活動で感じる課題やモヤモヤを一人で抱え込まず、悩みを共有し、意見交換できる相手をつくる。

④活動の意義を共に広げる

各ファシリテーターの活動紹介など、活動の見える化を進める。地域にとっての活動の意義、必要性をそれぞれの周りの人に伝え、共に広げる。

まちむら寄り添いファシリテーター養成講座 講師からのメッセージ



広石 拓司 株式会社エンパブリック代表

地域に寄り添うとは、現状に合わせることを意味しません。地域の人の思いや感じている課題をよく理解するからこそ、本当に地域の未来をポジティブにする動きを構想することもできるのです。その時、大切なのは異なる分野・立場の人が力をもち寄り、共に未来を創る仲間を増やすことです。対話の可能性を信じ、一緒にチャレンジしましょう！



船木 成記 一般社団法人つながりのデザイン代表

ファシリテーションは「状態をよりよくしていく」という意味であり、地域では、地域の人が目指したいところに辿り着くために何をするか、どんな振る舞いをするのかを共に考え、進めていく役割が求められます。地域の人と明日を共に創るのは簡単にいきませんが、丁寧に話を聴き、他者理解を深めるプロセスが大きな力を生み出すのです。



新 雄太

東京大学大学院工学系研究科
特任助教

私が調査やプロジェクトで常に問うのは「誰のために地域づくりをしているのか？」です。それは他でもない目の前の”人”のためです。地域に入って五感を使ってそこにあるものを見つけ、聞き書きを通して目には見えない地域の物語、言葉、構造などを理解する。そうした場の積み重ねによって、地域のこれまでに敬意が払われ、いまが見えるようになって、これからの聴き合うことが始まる。その地で生きる人に寄り添い、理解を深めることが第一歩なのです。